

「作文」 作品目次

一、金賞	いのちあふれる牧場をめざして	中野忠宗	141
二、銀賞	衝撃的な牛との出会いと私の夢	砂田 恵	144
三、銀賞	農業の不思議な力	米村 美沙子	146
四、銀賞	末っ子娘の夢	後藤 郁南	148
五、銀賞	「胡蝶蘭」という花に出会って	田 中 千 恵	150
六、銀賞	いちごケーキに賭ける思い	大江 康 児	153
七、銅賞（十編、要旨のみ掲載）	（同賞内は受付順）		157

(金賞)

いのちあふれる牧場をめざして

中野 忠宗

(独立行政法人農業者大学校 三年)

「俺は丹波の山の牛飼になる。いのちあふれる牧場の牛飼になる」。牛飼いとしての私の生き方が、ようやく見えてきました。

私の家は、兵庫県丹波地方にあります。両親は、周囲を山に囲まれた牧場で、搾乳牛五十頭、育成牛二十頭の典型的な規模酪農を三十年近く営んできました。幼い頃からずっと手伝いをしてきた私でしたが、そんな両親の酪農をどうしても好きにはなれませんでした。毎日決まった重労働と、いつも喧嘩が絶えない両親を見てきたからです。

それでも、「酪農家の後継者」という周囲の見えない期待に流されるように、父親の母校の農業高校へ、そして農業者大学校への進学を決めた私でしたが、「このままやりたくもない酪農を継ぐのだろうか」という思いは、消えることはありませんでした。

そんな私が、自分のやりたい酪農の姿を追い求めるきっかけとなったのは、ある畜舎の見学でした。立派な設備の整った畜舎と省力化されたシステム。そこで飼われているたくさんの牛たち。まさに近代的な酪農経営でした。しかし、コンクリートで作られた堅い床で足を傷め、その足を引きずりながら歩く牛や、たくさん牛乳を出すために大量の穀物飼料を与えられ、ただ搾乳を待つだけの牛たちを見た時、私は思いました。「この場所は、こんなにもたくさん牛がいるのに、何て寂しい所なのだろう。こんな酪農はやりたくない」と。そしてその時、「牛たちが生き生きとしている酪農がしたい」と思い始めました。

しかし、それからの私の体験は、自分のやりたい酪農が見つかるどころか、私から酪農を遠ざける出来事ばかりでした。

農業者大学校へ入学する前に、私は酪農王国・北海道で研修をしました。自分のやりたい酪農の形が見つかるのではないかと思っていたからです。しかし、北海道で体験したのは、私の実家より厳しい酪農の現実でした。夏場の牧草の収穫は、毎日十六時間以上もかかる重労働でした。その上、酪農経営で借金を負った酪農家が自殺するという悲惨な出来事にも遭遇したのです。「何なのだ！なぜ牛飼いが自殺をするほど苦しまなければいけないのだ」という思いが、激しく心を駆けめぐりました。

故郷に帰った時、3kmも離れた地区の住民から牛舎の臭い匂いがするという苦情を受け、父親がその対応に困っている場面に遭遇しました。「忠宗、酪農というだけで臭いイメージが離れない。これからどうしたらいいだろうか」。無口な父親が、初めて私に聞いてきました。うれしい気持ちと一緒に、将来を描けない酪農の姿に複雑な想いで父親を見つめていました。

農業者大学校へと入学した私は、ある時、同級生に「酪農は牛乳を生産するだけの工業だ」と言われました。私はその時、「この同級生が酪農のことをちゃんと知らないから、こんなことを言うんだ」と思っていました。しかし、循環型農業や市民農園、消費者との交流、地域の人たちと共に歩む農業を学んでいくうちに、私自身も「酪農は他の農業とはどこか異質だ」と感じるようになっていました。

考えてみると、酪農は牛を繋いでおく牛舎さえあれば、地域の自然と関わらなくても、牛に輸入飼料を与えてさえおけば牛乳が生産できるのです。一見、効率的に見えるこの生産システムですが、こういったシステムが、地域の人たちや同級生に酪農を理解してもらえない要因になっているかと思いました。

私は考えました。酪農も本来農業であるならば、他の農業と同じように、地域の自然に合った形があるはずで、そういう酪農はできないだろうかと模索するようになっていったのです。

そんな時、講義で、厳しい山の自然の中で美しい牧場を創った酪農家の話を聞きました。そして、その酪農家の書いた本に出会いました。斎藤晶さんの『牛が拓く牧場』です。「元々、牛も野生の動物であるならば、自然の中にいる動物たちと同じように生きていけばいい。だから、できるだけ山の自然と牛の本能に任せ、酪農をしよう」という斎藤さんの哲学が、その本には書かれています。私は「今の厳しい社会の中で、そんな酪農が本当にできるのか？」と疑いました。しかし、そんな酪農があるなら実際に見てみたいと思い、北海道旭川にある斎藤牧場に実習を申し込めました。

斎藤牧場の地に立つた時、私は自分の目を疑いました。まるでじゅうたんのような放牧地。自然のままの沢や丘や木々。牛たちは、野性味溢れる姿で自由に山の斜面を駆け上がり、牧草ばかりか、山に生える雑草や野菜を食べていました。こんな美しい牧場の中で、斎藤さんは自然に溶け込むように酪農をしていました。斎藤さんの酪農は、牛乳を生産する上で、牛ができないことは人間がやり、後はすべて牛任せなのです。

牛舎は、基礎のない柱とブルーシートだけの本当に簡単な造りでした。「お金が無ければ無いなりにやり方があるのだよ」。斎藤さんの言葉一つ一つに、自分の心の中で何かが動くのを感じずにはいられませんでした。

斎藤牧場の牛の乳量は、全国平均の約半分しかありません。しかし、施設にお金は掛けず、飼料もほとんど購入しないため、経費は掛からず、十分に経営は成り立っていました。

何もかもが常識はずれ。しかし、そこには旭川の自然のサイクルに歩調を合わせた、牛も人も自然も無理をしない素晴らしい酪農があったのです。私は、何とも言えない自然の命の輝きの中に、酪農の原点を見つけたような興奮に包まれました。

そんな斎藤牧場には、美しい牧場の話を聞きつけて、大人から子供までたくさんの方が訪れていました。子供たちが牛と共に遊ぶ山の牧場は、すべてが生き生きと見えました。

私の目指すべき酪農の姿がやっと見つかつたのです。自然のサイクルに歩調を合わせた酪農。私の故郷にしかない、私の故郷に合った酪農ができる！それは、農業である酪農なのです。

私の故郷では、平坦地が少なく、山は管理されない人工林でかなり荒れているのが現状です。この山で牛を飼おうと私は思いました。飼える牛の頭数は、故郷の自然の力により自ずと決まってきます。地域の自然の力とバランスのとれた頭数を飼えば、牛舎で出る糞尿は牧草地に還元され、山で牛たちが糞尿を出せば、牧草や木々の栄養になり、すべて吸収されるのです。

自然のサイクルに歩調を合わせた酪農とは、完全なる循環型の酪農でもあるのです。そうした酪農を実現し、私の故郷にしかない牛乳を生産したいのです。

便利で物が溢れる社会の中で、人々は自然に癒しを求めています。山にたくさんの人を招き、牛が作る美しい山の酪農に触れてもらいたいのです。丹波の豊かな自然は、春には山桜が咲き乱れ、夏には鮮やかな新緑が広がり、秋には紅葉とともに、特産の黒大豆や松茸が味わえます。訪れる度に毎回違った景色と味覚が味わえる丹波の山の牧場。私の故郷・丹波でしかできない牛乳を、牛が作る山の自然と丹波の特産品と共に消費者に味わって貰えるのです。

牛乳の値段が安くなっていく中で、省力化のために様々な技術や機械が開発されていき、何をしてもお金が掛かるようになってしまった今の酪農は、牛飼も牛も無理をしています。だからこそ私は、自然のサイクルに歩調を合わせた、人も牛も自然も無理をしない酪農を、地域の人たちと一丸となって創り上げたいと

思っています。

酪農を好きになれずに、後継者という期待に流されながらも、ずっと牛飼いととしての生き甲斐を求めてきた私でしたが、こんなにも素敵な大きな夢が見つかりました。

今の私は十年、二十年後の故郷の光景を想い浮かべることができません。そこには、子供たちと牛が自由に遊び回る、そんなのちあふれる豊かな光景が広がっているのです。